

古くて新しいイタリア

和田忠彦編

『イタリア文化 55のキーワード』

ミネルヴァ書房 二〇一五年四月

本書は「世界文化シリーズ」の一冊で、55のキーワードによる構成はシリーズに共通のものであるが、キーワードの立て方はもちろんのこととしてそれらの整理の仕方も各巻に自由が与えられている。本書は55のキーワードを七つの主題のもとに配しているのだが、この主題がじつにユニークである。この種の書物においては、美術、音楽、文学といったジャンルに分ける構成が一般的であろうし、イタリアに関してならば、さらに建築、デザイン、映画、宗教、食文化といった具合に魅力的な項目に事欠かないにもかかわらず、本書はそうしたやり方を採っていない。

第一章は「複数」のイタリア——都市国家のいま」と題され、第二章「単数」のイタリア——統一国家のゆくえ」と絶妙な対をなしている。その訳は、本書で最も頻繁に言及される一つの歴史事実、すなわち国家としてのイタリアはわずか百五十年前に成立したにすぎないという事実に基づいている。一方、イタリア文化を語るさいにまさにキーワードの筆頭に必ず挙げられる多様性は、中世後期にイタリア半島各地に誕生したコムーネ（中世自治都市国家）に源がある。中小国家の分立状態は十六世紀半ば以降、周辺の大国（スペイン、フランス、オース

トリア）の支配下に置かれ、ようやく十九世紀にリソルジメント（民族解放国家統一運動）が実り、一八六一年にイタリア王国が成立する。第一章と第二章はそのような歴史的背景から生まれる多様性と統一性の具体的な諸相をそれぞれ問題にしている。この二つの章に刺激されて、時代は古くなるけれども、評者からもささやかな例を一つ加えたい。十四世紀の詩人ペトラルカは、戦争に明け暮れるイタリア半島の君主たちを激しく非難する「わがイタリアよ」で始まるカンツォーネを書いた。しかし他方、代表詩集『カンツォーニエーレ』の表題には「フィレンツェの人ペトラルカ」と記した。

第三章「日常を彩る文化」はその名の示す通り、イタリア人の生活風景が対象とされており、母親崇拜、パスタ、エスプレッソ、マフィアなどがキーワードに選ばれている。それに対して、つづく第四章は「美から醜、醜から美へ」と題して、ひろく芸術と技芸をルネサンスから現代まで、類書に較べてかなりコンパクトに扱っている。

「内なる「他者」と外からのまなざし」と題される第五章は、歴史的要因に根ざすイタリアの多様性と統一性のあいだの矛盾と両立を問題にした第一章および第二章とは異なる角度から、イタリアおよびイタリア人のアイデンティティを問うている。内なる「他者」として、ヴァチカン、ユダヤ人、特別自治州外からのまなざしとして、ゲエテの見たイタリア、外国人が思うイタリアらしさ、などのキーワードが並ぶほかに、南イタリアに点在するアルバニア系コミュニティ「アルバレシユ」を紹介するコラムも興味深い。

第六章「異端という天才」は、前章の「イタリア人とは何か」

という問いかけになど左右されない芸術や学問の天才たち、言うなればイタリア文化の掛け替えのない担い手でありながらイタリア人の粹をはみ出した個が、詩人ダンテから映画監督アントニオ・ニーマまで八人取り上げられている。

最終第七章は、国家統一の頃の有名なモットー「かくしてイタリアはつくられた。次はイタリア人をつくる番だ」を踏まえ「ヘタリア人」をつくる」と題し、統一後から現代までの政治風土や社会問題が検討されている。多数派工作を意味するトラスフォルミズモ、テロが吹き荒れた一九七〇年代を指す「鉛の時代」、汚職、入ってくる移民と出ていく移民など深刻な項目が目立つ。

以上の概観からもおおよそ知られるように、「多様性を失うことなく全体像を素描すること」（編者まえがき）が本書の課題であり、そのために、古い歴史をもつイタリアが一つの国として成立したのはわずか百五十年前であるという話にここかしこで出会う。一八六一年に絶対的な基点を置く、これは本書の重要な特徴である。本書の目的にとってこれ以上の方法は見出せないかもしれない、と納得しつつも、イタリアの近現代史においてリソルジメントによる統一と並んで重要な、レジスタンスによるファシズムからの解放が過小に扱われているような気がする。本書の目的に照らしてそれは致し方ないとしても、一九四五年の解放直後に、苦しむ人間を慰める文化ではなく苦しみから守る新しい文化の必要を唱えて大戦後の文化運動を牽引したヴィットリオの名前がないのは残念な気がする。無い物ねだりを続けることが許されるならば、イタリア人に最も敬愛されている聖フランチェスコが取り上げられていないの

は残念に思う。都市がそれぞれ自分の守護聖人をもつことは語られているが、聖フランチェスコはイタリアの国全体の守護聖人であるから、「単数」のイタリアを表わす好例であるだろう。そればかりでなく、キリストに倣って清貧に徹する前代未聞の托鉢修道会を起し、この「小さき兄弟会」はたちまち成長して十三世紀前半のカトリック教会再生の立役者となったが、かろうじて公認されるまではむしろ異端視されていた点を考えれば、聖フランチェスコは文字通り「異端」という天才の一人に数えられるだろう。さらに言えば、ただしこれは本書の目的からそれてしまいうけれども、キリストという始まりに立ち返ることによって革命的な宗教活動に至った聖フランチェスコに見られるような、始まり、源への回帰が同時に革新的、前衛的な営為になるという関係性は、ルネサンスという大きな例が挙げられるように、イタリアにおいて決して特殊なものではないだろう。始まりへの回帰は本来のあり方を守ろうとする保守性、伝統と通じ合うものであるから、保守的、伝統的であることが同時に革新的であるというふうに関係性を拡張するならば、その土地の食材を活かした地域の伝統的な食文化を保護・推進することを目指す、グローバルイズムに支配されようとしていた現代にあってじつに革新的なスローフードの運動は、その格好の例であり、当然の選択とはいえ、本書のキーワードの中に見つけて最も満足を覚えた項目の一つである。そしてこのスローフードは、本書を通読した評者の頭の中で、別のキーワードである職人気質と結びつく。そしてこの二つのキーワードがイタリア文化の美しい面を代表するとすれば、さらに別のキーワードである汚職が醜い面を代表する。しかしどちらにも、

システムではなく、人間同士の直接的な繋がりを重視すること
において共通する。という具合に、本書の各キーワードは自由
に読者の思考を刺激する力も備えている。

(林 和宏)